

英語で表現する

松 浦 千佳子

1. はじめに

ピアノ学習と語学学習には一致する点が多い。ピアノが弾けるということは、実際に曲が弾けるということだ。それぞれの鍵盤がどの音に対応するかが分かって、その鍵盤を自由に操れる技術がなければ曲は演奏できない。日常生活の指の使い方とは異なった、指の使い方を体得しなければならない。そして、個々の鍵盤が正しく押さえられても、曲を解釈して個々の音またはフレーズが構築できなければ音楽ではない。この作業を深めたら際限なく、過去に学習経験があっても、しばらくピアノから離れていれば、技術は衰えていく。

語学も同様で、その言語で表現できなければ学習したことにはならない。個々の音・意味・統語構造が理解できても、聞き手・読み手に対して伝えることができなければ表現ではない。そしてより良い表現を目指すほどゴールは遠くなる。

では、表現に必要な技術とは何か？

確かに、上を目指せばきりが無いが、ピアノと同様、自分に合った技術による自分なりの表現がある。本稿では、特に日本人の音声表現に的を絞って、その技術的適応を整理し、表現指導について提言する。

2. 日本人の技術的適応

ピアノを学習すると、手の大きさから向き不向きを指摘されることがある。例えば手の大きさで知られたリストの曲は、手の小さな学習者には不向きで、本人が相当な覚悟をしたうえで練習を積み重ねる必要がある。だが、小さな手でも演奏可能な曲は無数にある。同様に、表現のための語学学習を考える場合、学習者の特性、つまり技術的適応を学習者も教師も心得ておく必要がある。

話す行為は、ピアノと同様、協調運動である。協調運動とは、「個体の多く

の筋群が神経系の作用によって、機能の上で相互に調和のある収縮と弛緩を行い、目的に合致する協同作用を現すこと」と定義される。発話の場合なら、呼吸を送り出す腹筋、声帯を振動・調節する喉頭周りの諸筋、舌・唇など調音器官を動かす筋肉、そして言語音を共鳴させる表情筋などの筋肉がバランスよく作用することで「話す」行為が成立する。

だが、この「バランスよい作用」は、一朝一夕でできる（できた）ものではないし、継続的な運動（練習）による補強が不可欠となる。どの人間にも通常はこの作用を支える能力があるのだが、習慣的な運動の性質によって「癖」ができる。クリティカルピリオド前の子供は各神経系・関与筋が柔軟で、素直に真似て、さらに繰り返し反復補強も遊びとして楽しむことで運動が定着する。だが、クリティカルピリオド以後になると、各神経系・関与筋ともに母語で使わない筋肉の反応性が鈍り、入念な練習を根気よく継続しなければ定着・維持できない。さらに、定着・維持したとみられる運動でも、中断期間が長引けば支障が生じるし、個別音と音連続は別の運動形式なので別途練習が必要となる。

発音指導と言うと、ミニマルペアで個別の音を学習するもの、文のアクセント・イントネーションを扱ったものが一般的だが、上述のように、一度限りの練習による定着は特殊なケースだと考えてよいだろう。日本の語学学習は大半がクリティカルピリオド以後で開始され、通常的生活環境では表現することで練習・維持できる場も極めて少ない。

2.1 骨格

伝統的に、椅子ではなく床・畳に座る生活を取っていた日本人の骨盤はやや後傾していることが多い。そして、日常的に腰ひもの位置で腰を張ることによって着物を留める姿勢をとり、腰ひものを縛る位置である丹田を意識した呼吸をとっていた。一方で西欧流の椅子の生活は骨盤を直立させるもので、ベルトで衣服を身体に締め付け、その結果、みぞおちあたりを張らせた呼吸が行われる。いずれも腹筋を使った呼吸様式だが、前者の場合、重心が下でどっしりとした安定した動きに適するのに対して、後者では重心が上となり派手でリズムカルな動きが得意となる。

現代の日本では椅子の生活が大半を占め、日常的に着物が着られることも稀になり、丹田で呼吸を支える姿勢が保たれなくなっている。とはいえ、依然として、畳で胡坐がかける生活スタイルも続いており、西欧流の骨盤直立に

よる呼吸が確立したとも言えない。

よって、大きなジェスチャーも英語の閉音節のリズムも、理解はできても、いざやってみるとなるとどこか違和感が生じることになる。

また、典型的な欧米人にみられるように、頭蓋に奥行きがあれば声道が狭く長くなり、必然的に息の強さが保てるが、典型的日本人の奥行きのない頭蓋骨では息を強く保つにかなりのエネルギーが必要となる。日本語の様に減衰する言語であれば問題がないが、英語のように主要語が文末に来る確率が高くて減衰せず、さらに子音が強い言語には不向きである。声道の短さは、後舌の動きにも影響し、例えば、母音の/u/が前舌で発音されることもある。

2.2 音韻

英語は日本語に比べて音韻の数が多い。とりわけ舌や唇の動きが大きい。

日本語にない音の代表として、/f/、/v/、無声/th/、有声/th/、/r/が挙げられるが、これらは単音でも発音が難しいだけでなく、舌や唇の大きな動きに慣れていない日本人学習者には音連続の形式によってかなりの困難が伴う。

なお、指導を誤って解釈した結果、発音様式を混同している場合もあり、/f/、/v/については「上の歯で唇をかむ」という表現から、摩擦音ではなく破裂音に近い音を産出する学習者もいる。/th/も同様で、無声の/th/については/ス/と表記されることから、/s/との混同が多い。

こうした音を表現するレベルでは、適切な文脈・視覚的資料があれば意味の混乱が避けられることもあるので、実はそれほど神経質に扱うものではないだろう。実際、うまく発音するためには、発音の仕組み・違いを十分理解した上で、学習者自身が試行錯誤しながら自分の身体に一番適したやり方を体得していくしか方法はない。本人が意識して発した音が、他人には違って聞こえることもあり、なかなかもどかしい作業を重ねる必要がある。学習者の覚悟がなければ、習得は難しい。

実際、発音の問題は日本人にとってはトラウマともいえるべき問題だが、近年、センター試験のリスニング導入、中高の「話す」指導の充実などから、少なくとも10年前の大学生に比べれば、英語の音に敏感な学生が増えた。人前で話すことについても、以前よりずっとハードルが低くなったようだ。だが、その一方で、ネイティブ信仰がさらに強くなったようにも感じる。世界の英語話者人口中、ネイティブスピーカーは40%を切り、今ではネイティブは少数派とな

り、それもアメリカ、イギリスと大きく区分され、さらには、地域方言もある。何をもって「ネイティブの正しい」発音とするのか、またそれを身に付けることにどんな意味があるのか甚だ疑問を感じるが、もしかすると、昔ながらの日本語訛りの英語に対する自己嫌悪的拒否感があるのかもしれない。

だが、表現レベルで必要なのは「正しい発音」ではなく、「(相手に) 届く発音」であらう。こうした事情は何となく理解できても、今一つ自分が学習してきたことに対する自信がないというのも日本語学習者の特徴だろう。

2.3 教育

日本の教育・政治・経済がすべて日本語でまかなえるということは、日本と言う国・言語の強みだが、同時に、英語をはじめとする外国語習得の障壁でもある。さらに、表現を目的とするのであれば一クラスあたりの学生数は 20 名が限度であると考えられるが、本学はもちろん、通常の学校教育でこの人数で教えられているところは少ない。こうした環境で外国語学習の効率を上げようとするれば、文法・語彙教育に重点が置かれるのも無理はない。「中高 6 年勉強したのに英語が話せない」とよく言われるが、読む・聞く・覚えるという受動的な教育であれば当然のことで、教育のレベルが低いわけではない。少なくとも文法については、日本人学習者のレベルは高いものである。

さて、日本の典型的な教室でのやり取りは、質問と回答である。学習者の発言はその場で「正しい」ことを答えて教師が確認することで、対教師、あるいは学習者間のオープンな会話は限定されている。これに思春期独特の羞恥心やプライドが相まって、学習者はなかなか発言したげらない。唯一の表現の場ともいえる教室での発言回数が低ければ、頭に語彙や文法を入れることはできても、構音器官の「筋肉の記憶」として言葉が学習されない。

表現にはバラバラの語を結ぶ流れが不可欠だ。それは、次に来る語・音に対して調音器官が準備されて初めて成立する。目や頭の記憶がこの流れを生み出すことはない。単語・単文のレベルではなく、ある程度まとまりのある文章で言葉を発する練習は不可欠なのだが、残念ながら、日本人学習者にはこうした経験は十分でない。

3. 英語を相手に届かせる言葉の明瞭さ

以上のように、日本人学習者は、文法構造の知識は上級レベルであるにもかかわらず、表現は初級と言うバランスの悪い状況で高校までの教育を負える。大学の英語教育において、表現は個人的に学習する課題として、さらに知識を深めるアプローチもあるかもしれない。

だが、上級レベルの知識を持っているということは、学習者自身の目標値がかなり高くなっているということでもある。さらに、前述のように、表現練習は不十分なまま大学に進んでいる。目的によっては、初級レベルの知識、あるいは不完全・正しくないと言われたものでも十分に表現できるという感覚が見事に抜けている。

意識の改革と言うと大げさだが、表現レベルに応じて、学習者個人の選択が可能であるということに気付かせられたら、表現指導の第一関門がクリアできるのではないだろうか。そのためには、さらに知識やルールを押し付けるのではなく、学生本人によるアウトプットの場をできるだけ色々な形で提供していくことも必要なのではないだろうか。

では、具体的にどのようにしていけばいいのか。

アウトプットと言えば、近年プレゼンテーションが大学教育で多く取り入れられているが、何をどのように発表していくのか知識を与え、それに倣っているだけでは、結局アウトプットとは言い難い。筆者は今年度の大学院のプレゼンテーション授業で、一人当たり平均1時間の個人指導を行い、学生が「伝えたいこと」を明確にさせた上で、問答形式で内容を整理し、原稿を準備させた。そして、内容・レベルに合わせて、言葉だけでなく、PPTの図・動画で補足するように工夫させたところ、かなりの成果があり、学生本人も達成感と自信を得る様子が見て取れた。大学では、本来こうした指導が理想と考えるが、これはあくまでもこのプレゼンテーション科目が必修科目で、日本語のプレゼンテーションも鍛えられていた大学院生相手だったからこそ可能だったのだろう。つまり、学生本人に覚悟がなければ、なかなか成功しない。

では、覚悟と言う点ではもう少し準備ができていない学生、例えば1年次学生でできることを、まとめてみる。

3.1 息の使い方

本学の英語科目のクラスサイズは約 40 人で、英語教育には理想的なサイズではない。だが、これは言葉の明瞭さを練習するには理想的だ。というのも、学生の学習経験から大きく逸脱するサイズではなく、個別で話すよりも明瞭さが要求されるからだ。特に、本学の教室は声が響く構造になっているので、マイクrophonなしで声量、息の使い方を練習することができる。

息の使い方は会話・プレゼンテーションの授業でなくても指導ができる。読解・文法の授業でも、実際に声を出させればいいだけのことで、内容構成を吟味していかなくていいという点ではかえって好都合だろう。

だが、一人の学生による一文、またはパラグラフの音読、あるいは学生全員で一斉に音読させただけでは効果は期待できない。発音の苦手な学生にとって、個人指名の音読は心的負担が高い。斉読も合唱練習のようなもので、苦手な学生が身を入れて練習できるとも思えない。

筆者が最近授業に取り入れているのは、学生が座席順にコンマ・ピリオドで交替しながらパッセージを読み進める「分かち読み」だ。発音が不明瞭、声量が不十分、不適切な間があるなど、不自然な読みになったら、もう一度初めに戻ってやり直す。

この「分かち読み」は、あるドラム教室のリズム練習にヒントを得て考案したのだが、担当箇所の予測がつきにくいので全員の集中力が高まる。始めの段階では声量と間に注目させ、慣れてきたところで、意味の判別に支障をきたさず音韻に注目させる。流れが途切れたらやり直しが延々と続く。順番によっては、“However” 一語で終わる場合もあるので、いつの間にかゲーム感覚になり、学生の精神抑制の閾値が低くなる。また、定期的（例えば 3 週毎）に座席を変えて、教室のいろいろな位置で声量の調節が行えるようにする。

大変単純な作業ではあるが、開講期間を通して、何度繰り返し行っても、不思議なほど飽きがこない。簡単で短い題材でもできるタスクだが、日本人学習者の場合、難易度の高い語・構造を含んだ題材のほうが、プライドを損なうことなく実践できるようだ。平成 26 年度は教科書を題材にしたが、シェイクスピアの戯曲や、キップリングの詩など、音の組み立てが面白く、読み込むにつれて意味の発見があるような題材を繰り返し長期間に亘って扱うことも十分可能だろう。

指導上配慮しなければならないのは、あくまでも言葉が届くかどうかを最重

要項目として細かな発音の歪みはある程度許容することだが、高頻度語や学生の専門分野に関わる用語については、ある程度精度を高めさせる工夫もできる。

こうした作業で、教師だけでなく、クラス全員に「届く」声を調節する息の使い方が指導できる。これは1対1や少人数のやり取りでは不可能で、大人数クラスならでは可能な作業である。

3.2 発声を明瞭に伝える

発声を明瞭に伝えるためには上顎、正確には軟口蓋を効果的に使うことが重要である。これは日本語でも英語でも同様だが、先に述べたように英語の発音は日本語よりも舌の動きが多いので、英語の場合は特に重要だ。原則として、奥歯に割り箸をあてがった程度に顎を開け、口角を上げた状態にすると軟口蓋が上がり、発声が明瞭になる。だが、日本人学習者の場合、顎の開きが少ない、場合によっては、歯を食いしばって発音する学生がいる。

発音の授業で「大きく口を開けなさい」と指示することがあるが、これは軟口蓋を上げて声道を大きくすることであり、開口部を大きくする、あるいは唇の動きを極端に横に広げることではないのだが、大人数相手の指導では誤解が生じやすい。英語の極端に丁寧な発音では唇を絞り込みながら縦方向に開けた上で、声道の奥の方を使って構音するが、日本語学習者の中には唇を横方向に開いて声道の前の方で調音する者がある。

顎を緩めて口角を上げた表情と歯を食いしばった時の表情を比べさせ、それぞれの表情で自分の音を確認させよう。本人にとって適切な感覚を確認・記憶させることができるだろう。日本の文化的習慣、特に思春期の学生は、教室という場で表情豊かに話することに抵抗を感じがちだが、表情は言語表現を視覚と共に聴覚的に補うものである。詩や文学など、感情表出のある題材を扱って音読することで、感覚が養われるのではないかと考えられる。

3.3 調音法

日本語（特に本学の主要な部分を占める東海地域）の子音は、英語に比べると弱い。そのため、例えば日本語の/m/は英語にも存在するが、日本語の音声表現では母音より弱く、英語ほどしっかりと唇が閉鎖されなくても許容される。/w/音も同様であり、その他も子音も極めて弱く、語頭の/t/は、英語のように息を伴うことは稀である。また、母音の調音では舌の関与があまりない。

こうした違いが如実に感じられるのが歌である。歌手の母語によって調音にどんな違いがあり、それが歌の中にどんな違いとなって出て来るのかを聴き比べ、実際に声に出して、自分の癖、あるいは日本人の癖が確認できる。

ジャズのスタンダードナンバーは Youtube など日本人歌手の音声もたくさん出回っているので、題材として取り上げるには適切だ。Fly me to the moon は、今の学生も良く知っているし、何よりも、出だしが連続子音で、/th/、句末の後舌母音と 3 拍子揃っているのが、聴き比べ、歌い比べするには最適だ。実際に目で見て聴くことで、さらに現実的に違いが感じられると考えるので、オペラ指導者に特別講義という形でデモンストレーションを行っていただいている。

日本語の調音器官の動きは、英語を発するのに比べると極めて弱く、ゆったりとしているので、日本人学習者は通常よりも極端に調音器官を動かす必要がある。だからこそ、特に自分から発信していかなければならない場合には、ゆっくり丁寧に発音する必要があることを強調するべきなのではないかと考える。

4. まとめ

数年前、本学の A 先生から、「国際会議の司会をすることになったので、助けてほしい」との相談を受けた。当初は英語教員である気負いと A 先生への遠慮から、関連教材を手渡すだけで済まそうとしたのだが、「審議事項を承認するだけの分科会で、他の仕事をいくつも抱えているから準備に時間がかけられないから、とにかく簡単に教えてほしい」とのことで、半ば遊び半分で言葉は原則単語にして、ジェスチャーで補う原稿を作成した。そして細かい発音にはこだわらず、とにかく声に出せるかだけを確認した。結果、会議は無事終了し、引き続き依頼を受けるようになった。なお、この分科会は、特に日本人の先生方に好評だったようで、わざわざ見学者が訪れるようになったという。

国立大学工学部の教授である A 先生が決して英語ができないわけではない。なので、こうした原稿の依頼が来る自体、訳が分からずにいたのだが、その後繰り返しおっしゃったのは、「この表現で十分伝わると言われたことで安心して話ができた」ということだ。

複雑で見栄えの良い言い回しを教えること、英語らしい発音に矯正すること

は、もしかすると、教師の自己満足なのかもしれない。本学のように、将来、プロのエンジニアとしてのアイデアを英語で伝えることが要求される学生の必修科目としては、事情や目的に合わせて負担の少ない方策が考えていけるような教育をするべきなのではないだろうか。「英語で表現する」という観点からすれば、まず「相手に届く声」の指導だ。自分のアイデアを単純な言語形式で自信を持って表現できるようにする。こうすることは必ずしも学習意欲をそぐものではない。もっといろいろな言語形式を学びたい、もっと向上したいという学生を育てることにもなるのではないかと考える。